

## 医療技術者をめざす学生の心理学への関心

—その2 自己課題の解決について—

川崎医療短期大学 一般教養

片山 英雄

(平成3年9月26日受理)

The Interest of Paramedical Course Students in Psychology (2)  
Solution of their own problems using psychology

**Hideo KATAYAMA**

*Department of General Education  
Kawasaki College of Allied Health Professions  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Received on September 26, 1991)*

### 概 要

前回の研究で医療技術者をめざす学生は「医療の場の心理」への関心が高いことが判明している。今回はその学生が受講前に「心理学を学習して知りたい」と考えた自己課題について講義終了後の理解度を調査した。

対象学生は1990年度に心理学の講義を受講した川崎医療短期大学の学生429名である。それぞれの講義の終了後、終末テスト時に自分の課題を再記述させ、そのことに関連して理解できたことを報告させた。学生の回答を一応理解に到達できているものを基準（1点）とし、5段階に評定した。

その結果、学科（クラス）別分析では、第1看護科が一番高く（1.31点）、次に医療秘書科A（1.2点）であった。以下、栄養科、臨床検査科、医用電子技術科・医療秘書科B、放射線技術科、第2看護科の順であった。当然であるが、講義で扱った内容に関連する事項の理解度が高かった。関心項目別の分析では「医療の場の心理」が特に優れ（1.23点）ていた。

このように、医療技術者をめざす学生は「医療の場の心理」の理解度が高いことが明らかになった。これは講義前よりこの話題について強い関心を持っていたので、特に真剣に受講したためであろう。

In a previous study, it was shown that paramedical students have a great deal of interest in psychology in relation to medical care. The present study was designed to investigate the levels of understanding the students achieved about what they had wanted to learn with regard to personal and emotional problems or problems with patients through their study of psychology.

The subjects of the investigation were 429 students of Kawasaki College of Allied Health Professions, who received lectures on psychology during 1990. After the

lectures, they were asked to describe the problems or difficulties they had in understanding themes dealt with in the psychology course and how well they had been able to solve them following the psychology lectures. The students' responses were classified into five levels according to the degree of understanding they had achieved. The solution of these problems, which was considered as achievement of understanding, was fixed as the standard level (point 1).

The results were analyzed from three viewpoints:

- (1) The average points for eight courses: It was found that the primary nursing course achieved the highest level of understanding (1.31) and the second highest was the medical secretarial course A(1.2), which was in turn followed by the medical dietician course, the medical technologist course, the medical engineering course, the medical secretarial course B, the radiological technology course and the secondary nursing course.
- (2) Relation to the contents of the lecture: Students generally got high point; i.e., achieved a high level of understanding of themes dealt with in the course when those themes were related to the contents of lecture.
- (3) The problem of interest: Students showed the highest interest in 'psychology in relation to medical care' (1.23).

It is thus clear that students who intend to join one of the allied health professions can achieve a deeper understanding of psychology in relation to medical care. This is probably because their strong interest in the themes dealt with in the course has a good effect on their attitude toward the lectures.

## I はじめに

1985年以来学生が心理学のどの分野に関心を向けているか調査している。それはカリキュラム設計の参考にするとともに、学生自身にも課題意識をもって受講させようと考えたからである。そこで講義をはじめる前に、自分で学習したい問題をきめさせて、講義の終了時に各自でどの程度解決できたか検討させてきた。

前回の研究は1985～1990年までの6か年間に、学生が報告した自分で学習したい問題の分析であり、これによると「他人の心を知る」「精神のメカニズム」といった、心理学専攻学生の場合(藤永, 1981)<sup>1)</sup>と共通点も認められた。しかし、医療技術者をめざす学生の特徴として「医療の場の心理」への関心の高いことが確認できた(片山, 1990)<sup>2)</sup>。

今回はこのようにして、学生が自分で設定した課題「心理学を学習して知りたいこと」(以下、自己課題と呼ぶ)について、講義が終了したとき自分でわかったことについて報告させた。これによって、講義によりどの程度理解できたかという理解度を知ることができるとともに、自分の持っている問題についての課題意識の強さも把握できると考えて調査・分析する。

## II 研究の手続き

1990年度に心理学の講義を受講した川崎医療短期大学の学生全員(429名)について、それぞ

れの講義の終了後（終末テスト時）に自己課題を再記述させ、そのことに関連して理解できたことを記述・説明させた。この学生の回答を実施した講義内容と比較するとともに、理解状況を評価・分析した。

### 1. 対象学生，講義と調査スケジュール

対象学生；学科別人数（医療秘書科のみクラス別，臨床検査科と医療秘書科は2年次生，他はすべて1年次生），開講日と授業回数（1回は90分間），調査日；講義終了後（終末テスト時）を表1にまとめて示す。

表1 講義と調査スケジュール

学 級	1N	2N	MT	RT	MSA	MSB	MN	ME
対象人数	54	52	58	57	50	54	52	52
開 講 日	4/13	4/12	9/ 1	9/ 5	5/ 7	4/16	4/17	4/11
講義回数	15	16	8	10	11	9	11	15
調 査 日	9/28	9/27	11/24	11/28	12/3	11/5	7/10	9/19

1N；第1看護科，2N；第2看護科，MT；臨床検査科，RT；放射線技術科

MSA；医療秘書科(A)，MSB；医療秘書科(B)，MN；栄養科，ME；医用電子技術科

### 2. 実施した講義内容（項目別）

実施した講義内容を学生の持っている関心分野（項目）別（片山，1990）<sup>3)</sup>に整理して示すと次のようになる。実際の講義の順序はこの通りではなく、「心理学とその役割」という基本的なものから始め，発展的な話題として「患者の心理」を最後に取り上げた。

項目	講義の主題（具体的内容）
}	自分の心の把握……………動機としての情動，適応をめざして
	他人の心を知る……………社会行動とコミュニケーション
	精神のメカニズム……………認知の過程，学習の原理，問題解決
	性格と発達……………人格とその形成
	医療の場の心理……………共感のメカニズム，患者の心理
	その他……………心理学とは，心理学の役割

### 3. 調査原文と調査の実施

次の設問を示し，自由に記述回答させた。

○月○日に心理学の講義が始まりました。そのとき自分が「心理学で学びたい」と考えていたテーマは（理由も含めて）何でしたか？  
その事に関連してどんな事が分かりましたか？ 詳しく説明しなさい。

この調査を実施することは開講時に学生に告げているので，関心の強い学生は調査日（表1

参照) までにいろいろ調べノートに要点をまとめたり, 参考書を読んだりして回答していた。反面, あまり関心の無い学生は自分の課題を書いたノートすら忘れ, あわててテスト時にたずねる状態であった。

#### 4. 回答文の判定

学生の回答は自由記述である。そこで, 各学生が設定した自己課題が講義で取り上げられたものであるかどうかをまず検討し, つぎに, それに対する説明が適切で妥当であるかについて, 次の判定基準を立て評価した。この判定法は教授・学習過程の研究法(理解水準設定による回答分析)として開発したものである(片山, 1985)<sup>4)</sup>。ほぼ理解できていると判定できる回答を基準(1点)として, その上下に特に優れたものを(2点), 誤答を(0点)と次のような基準で判定し, さらに, その中間にそれぞれ1.5点と0.5点を配点し, 5段階に評定した。

講義での扱い	判定基準	配点
直接取り上げた 課題	講義内容を総合的にまとめ, 自分の体験分析や 考えも加えた特に優れたもの……………	2
	講義内容をあてはめて説明したり, 自分で調べ たりして一応適切な理解に達したもの……………	1
どちらとも 言えない	講義内容と全く無関係な説明であり, 単なる常 識的判断など不適切な回答と考えられるもの……………	0
	取り上げられて いない課題	自分の考えと講義内容を関連させた優れたもの…………… 2 自分で調べ適切な理解に達したもの…………… 1 独断的な考えや間違ったもの…………… 0

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 代表的回答例

実際の学生の回答例(原文)を引用してその評価・判定のようすを解説する。

得点, 関心分野の項目, 講義での扱い, 学生(学科名・学生番号・イニシャル), 講義前の「自己課題」, 講義終了後の「回答」, 判定理由の「解説」の順に示す。

例① 得点2点「精神のメカニズム」講義で取り上げた。2N, no 46, K. H.

「自己課題」人間の心理とは何によっておこるのだろうか?そして, その心理と行動はどのように結びつくのだろうか。理由:どのような時に心理が動くかわからない。そして, その心理によってなぜ行動する事ができるのか。

「回答」心理学とは人間を理解するための行動科学の一つで「行動」によりその人の精神や心の仕組みを解明している。外面に現れた行動は公共性, 客観性があり, 人間の心を解明する

ためには大切である。そして、行動に伴う感情や動機も心理を知る上で大切である。しかし、行動はそのままその人の意識を現すものではなく、意識と行動の間にはギャップがある。

人間の心理とは、各人々、それぞれの内にもっている考えや思いをいい、その考えや思いを無意識のうちに行動・態度で表す。だから、その無意識の行動や態度を観察するとその人の心理の状態をつかむ事ができる。したがって、心と行動は深く関連し合っている。そして、心理はどのような時におこるのかという事については、たえず、心の中でおこり、知らず知らずのうちに行動しているという事も理解できた。

したがって、看護婦の観察の重要性をこの心理学より知りました。ただ、記録を書くために観察するのではなく、その患者さんの心理を知るためにはただ話してその患者さんを知るのではなく行動を観察する事でさらに患者さんを知る事ができると思いました。

「解説」心理と行動の関連についての講義内容を総合的にまとめている。しかも十分とりあげなかった無意識の行動についても自分から考えを述べ、さらに医療の場についても看護婦としての立場での意見も加えてあるきわめて優れたものである。

例② 得点2点「自分の心の把握」講義で取上げていない。1N, no 39, S. H.

「自己課題」普通の生活をしていて、大勢の人々の中にも、時々孤独だと思ふときがあり、そんなとき、どうして孤独感がわいてくるのか心理学で学びたいと思いました。

「回答」講義の中の一つで「適応めざして」というテーマの中で、適応とは環境と個人の均衡がとれた状態とあり、「孤独」とは、そのバランスが崩れたものであり、精神的健康を失ってしまったのだということが分かった。自分の個性や外的現実のかけがえのないつながりを両立することが大切であることがわかった。

【解説】この話題は直接講義では取り上げていない。しかし「適応」の講義内容との関連を見だし personality の問題にもつながりを見つけて自主的に解決しようとしている優れたものである。

例③ 得点1点「医療の場の心理」講義で取り上げた。MT, no 48, Y. F.

「自己課題」患者さんの心理とは。理由：病院実習の時に生理機能関係の実習では患者さんと接する機会が多いので患者さんの心理が少しでも分かるようになれば不安を少しはとりのぞいてあげられると思った。

「回答」病気にかかった患者さんは大なり小なり身体的変化だけでなく、不安やあせりなど様々な心理的变化をおこすため、患者さんと同じ気持ちになって、自分自身の問題として考えることが大切であるということが分かった。

【解説】臨床実習現場で患者に接する機会を持った学生の回答である。講義では身体の障害と、それにとまなう心理的問題を病状、personality、物的・人的環境の面から組織的に説明し、自分の病気体験も考えさせた。それに対して、この回答は一般的に要点を述べているに過ぎず、実習体験も十分生かされているとは言えない。適切ではあるが具体性が乏しいので1点

と判定した。

例④ 得点1点「他人の心を知る」講義で取り上げている。RT, no 14, M. K.

「自己課題」心理学を学ぶことによって、他人の心情や人格が少しでもわかるようになりたい。

「回答」人格や心情をわかるのは難しいが、その人の行動を手掛かりとし、その行動によって推測する。行動の観察のみでは本当にとらえることは難しいが行動を総合し、関連づけ、整理することにより、ある程度説明が可能となる。

〔解説〕人間の行動を通して心情を把握しようとする基本的な理解に立っていることは適切である。特にいくつかの行動を総合してとらえようとしている点はよい。ただし講義内容の単なる反復にとどまっている。

例⑤ 得点0点「他人の心を知る」講義では取り上げていない。ME, no 36, K. N.

「自己課題」人がもしこわいきょくちにたつたときどう判断してその場をうまくのがれるか。

「回答」このことは、“問題解決”だと思う。問題解決とは、問題を意識し、(適切な処理をとれるように知的に適応することの必要性を意識し解決する)・方略をたて、(解決手段を発見し、仮説をたてて見通しをもつこと)・実行と検証(解決行動を実際に遂行して解決結果を吟味検討すること)をするとうまくその場を逃れられると思う。

〔解説〕たしかに問題解決と関連はみられるであろうが、「こわいきょくちにたつた時」こうした合理的な解決行動がとれるであろうか。理性を失っている場合、その感情面の安定を回復することこそ必要であろう。その面への着目がかけているので適切な回答とは考えられない。

例⑥ 得点0点「その他」講義で取り上げた。MSB, no 84, S. F.

「自己課題」心理学の定義を学びそれから自分の心理状態を知りたい。

「回答」心理学の定義というものはありませんでした。時と場合に応じいろいろ自分なりに考えていくのが心理学だと思いました。…… 4/16に考えたテーマは大ざっぱなテーマだったと反省します。

〔解説〕心理現象の客観的な現れである行動を手がかりにして、精神や心の仕組みを解明するのが心理学であると定義を教授したのに、全く無視している。また、「自分なりに考えていく……」というのは、主観的な判断でよくないと解説したのに理解できていない。反省している点はよいが、内容的には不十分である。

## 2. 理解状況

学生の回答を5段階に評定し、その得点を学科(クラス)別(表2)、講義との関連(表3)、学生の関心分野(項目)別(表4, 5, 6)に整理して表した。

### (1) 学科(クラス)別分析(表2)

学科(クラス)別に得点を集計し、平均と標準偏差を求めた。平均は第1看護科が最高(1.31点)で、次に医療秘書科(A)が続き(1.2点)、以下栄養科、臨床検査科、医療秘書科(B)と医用電子技術科、放射線技術科、第2看護科の順であった。分散については大差は認められなかった。

表2 学科(クラス)別集計 (人数)

点	1N	2N	MT	RT	MSA	MSB	MN	ME	計
2	14	6	4	6	11	4	7	5	57
1.5	15	9	16	7	10	13	11	13	94
1	16	17	22	24	19	23	17	17	155
0.5	9	13	13	15	8	9	15	13	95
0		7	3	5	2	5	2	4	28
$\bar{X}$	1.31	.94	1.04	.95	1.2	1.02	1.06	1.02	1.07
SD	.52	.59	.49	.54	.56	.52	.54	.55	.55

平均得点から4つのグループに大別できる。まず、第1看護科、医療秘書科(A)は基準(1点)より上位の得点をしたグループである。次に栄養科(1.06点)、臨床検査科(1.04点)は、ほぼ調査対象の学生全体の平均(1.07点)に近いグループといえる。また、医療秘書科(B)と医用電子技術科(1.02点)は、基準点に到達しているグループである。さらに、放射線技術科(0.95点)、第2看護科(0.94点)は基準を下回った得点にとどまったグループであった。

この低位のグループの個々の回答を検討すると、全般的には理解力が劣るため講義内容が消化できていない者が多かった。そのほか、自分の課題の説明としては見当違いの他の事項を引用して説明したり、いくつかの話題を取り上げたので全体の筋が立たず混乱した説明になってしまったりするものがみられた。しかし、第2看護科の学生の中にも、代表的回答例①で引用したno 46, K. H.のように、事前によく調べ総合的にまとめられた優れた回答ができた者もいた。

## (2) 講義での取扱いの有無 (表3)

表3 講義での扱い (人数)

点	有	中	無	
2	33	20	4	57
1.5	57	30	7	94
1	87	51	17	155
0.5	49	36	10	95
0	10	13	5	28
$\bar{X}$	1.11	1.03	.94	1.07
SD	.53	.57	.55	.55

有；直接取り上げた課題  
 中；どちらとも言えない  
 無；取り上げていない課題

当然のことながら講義で扱った事項についての理解がよかった。統計的有意差 ( $t$  検定  $1.92$   $t_{0.1} < t_0 < t_{0.05}$ ) とはいえなかったが、十分に傾向は認められる。しかし、講義で扱っていないものに対しても2点が4人もいるし、講義で扱っていても0点が10人もいることは見逃せない。

## (3) 関心分野 (項目) 別分析

学生が関心を向けた分野 (項目) 別に集計し表4に示した。

表4 関心項目別集計 (頻数)

点	自分	他人	メカニズム	性格	医療	その他	計
2	9	19	10	7	28	4	77
1.5	7	38	15	4	39	6	109
1	26	61	25	11	53	11	187
0.5	10	33	23	13	20	7	106
0	6	11	3	1	4	3	28
$\bar{X}$	1.03	1.06	1.04	1.04	1.23	1.02	1.10
SD	.58	.54	.54	.58	.52	.57	.55
%	11.4	32.0	15.0	7.1	28.4	6.1	100.0

表4によれば、「医療の場の心理」がきわだって高得点 (1.23点) に達していることが目につく。そのほか「他人の心を知る」がやや高い傾向 (1.06点) にあるが、他はあまり差がない。この関心分野別の傾向をさらに詳細に分析するために、各学科 (クラス) 別の平均点を表5に、また各学科 (クラス) 別にそれぞれ関心を示した項目の割合を百分率で表して表6にまとめた。



表5 各学科(クラス)項目別得点 (平均点)

	自分	他人	メカニズム	性格	医療	その他
1N	1.38	1.39	1.5	.94	1.30	1.5
2N	.64	.73	.96	1.	1.16	1.
MT	.63	1.06	.8	.67	1.25	1.
RT	.77	1.04	.71	1.08	1.13	
MSA	1.34	1.29	1.25	1.	1.25	1.3
NSB	1.11	1.	1.04	1.14	1.1	.83
MN	.88	.09	1.	1.25	1.3	.63
ME	1.21	.98	1.06	1.1	1.23	.75

表5によると、第1看護科、医療秘書科(A)は「医療の場の心理」を含むほとんどの項目(性格をのぞく)にわたってすぐれた成績(1.25点以上)になっている。この全項目にわたる高得点が、上位グループになった原因であろう。次に、「医療の場の心理」のみ高成績な学科は、栄養科(1.3点)、臨床検査科(1.25点)、医用電子技術科(1.23点)、第2看護科(1.16点)、放射線技術科(1.13点)であった。医療秘書科(B)には項目別に顕著な傾向は認められなかった。これらのことから、医療秘書科(B)をのぞき、各学科の学生が「医療の場の心理」に優れた成績を上げ、高得点に達していたことが確認できる。

同じ医療秘書科でありながらクラス(A)とクラス(B)に差が出ているのは、講義回数に違いがある(A11回、B9回)ことが影響していると考えられる。

表6 各学科(クラス)項目別割合 (百分率)

	自分	他人	メカニズム	性格	医療	その他
1N	10.7	29.3	8.0	10.6	36.0	5.3
2N	9.7	18.1	19.4	2.7	43.1	6.9
MT	6.7	28.3	16.7	5.0	33.3	10.0
RT	17.2	39.1	10.9	9.3	23.4	
MSA	13.6	35.6	23.7	1.7	16.9	8.4
NSB	15.3	39.0	20.3	11.9	8.4	5.1
MN	6.6	32.8	6.6	6.6	40.9	6.6
ME	12.3	36.8	15.8	8.8	19.3	7.0

各学年(クラス)別に一番関心を向けた割合の多い項目は「医療の場の心理」と「他人の心を知る」の2分野であり、一番多いものをもとにすると、次の2つのグループに大別できる。

「医療の場の心理」；第2看護科(43.1%)、栄養科(40.9%)、第1看護科(36%)、  
臨床検査科(33.3%)

「他人の心を知る」；放射線技術科 (39.1%)，医療秘書科(B) (39%)，  
 医用電子技術科 (36.8%)，医療秘書科(A) (35.6%)

全体的にみても表4のように「他人の心を知る」(32.0%)と「医療の場の心理」(28.4%)は学生が強い関心を示している部門である。しかも「他人の心」といっているが，単なる「他人」ではなく，医療の場で接する「患者」を意識していることが文章全体から伺われることを考慮すると，表5に表れている「医療の場の心理」に優れた成績を示していることはこの関心の深さと関連していると考えてよいであろう。

#### IV むすび

今回の研究でとった方法は，与えられた課題の達成度を教師によって判定されるという一般的な評価手続きと全く趣を異にし，学生自身が自分の到達度を評価するのみならず，課題そのものも自分で設定するというきわめて自主活動を重視したものであった。さて，実際にやらせてみると表2から明らかなように基準(1点)以上の者は306人(71.3%)に達しており，全くの誤答は28人(6.5%)にすぎなかった。十分に自己課題の解決能力をもっていることを実証できたのである。

統(1969)<sup>5)</sup>は，目標追求活動における自己調整機能の一環としての評価，すなわち自己評価の重要性を述べ，自己教育を発展させることを提議している。こうした自発性を喚起する方法は今後いっそう進展させる必要があるであろう。医療現場は日進月歩である。たえず自己研修をめざす職場に出て行く学生にとって，こうした機会をもつことは有意義であろうと考えられる。

ところで，医療系短期大学に進学した学生は，単なる一般教養としての心理学でなく，もっと自分の専門分野へ貢献する心理学を学びたいと考えていることをこの研究を進めながら強く感じた。それだけに，また指導する側の教師の態度へも鋭い眼差しを向けていることを見逃してはならない。次の一文はかつて紹介したものであるが(片山，1989)<sup>6)</sup>，教育学の講義の中で患者教育の方法として「分かりやすい教え方」の授業を終えた時，学生が書いた感想文の一つである。学生が教師の指導をどう見ているかという点についての示唆に富むものであるから引用したい。

J.S.のノートから 1988. 2. 19

ここの短大の先生はいろいろのタイプの人がある。

プリントを自分で作ってスライドを持ってきて詳しく説明する先生，黒板に書き続ける先生，ただ本を読んで線をひっぱらせる先生，冗談を言って生徒うけはいいけど授業はいまひとつの先生……。

やはり，ていねいに教えてくれる先生の講義は自然とこっちもまじめに聞く。しかし，線をひっぱるだけの講義はどうしても身に入らない。学習者のやる気を起こさせるのに，指導者がものすごく影響するものだと思う。(原文のまま)

単に国家試験に合格し，資格を獲得することがすべてであるという低次元の考えにとどまっ

ている者も若干はいるであろうが、かけがえのない人生を心ある医療人として過ごそうという熱意あふれる学生は、その期待にこたえる指導者を求めているだけにこうしたきびしい指摘も起こるのであろう。指導に当たる者は学生のこの熱望を満足させるべく自覚と研修を重ねることが必要であろう。今回の研究で学生が「医療の場の心理」への強い関心とそれを探究する姿が確認できたが、これにこたえる努力をつづけたい。

### 謝 辞

Abstract 作成にあたってご協力いただいた川崎医科大学特別講師 Mr. Waterbury, D. H.・川崎医療短期大学講師名木田恵理子先生に厚く感謝する。

### 文 献

1. 藤永保：心とは何か 講座 現代の心理学1 小学館 p.15 1981
2. 片山英雄：医療技術者をめざす学生の心理学への関心 川崎医学会誌 一般教養篇 no16 p.35~42 1990
3. 前掲 2, p.37
4. 片山英雄：小学校児童の関数概念の形成過程—誤認識の coding の試み—日本教育心理学会第26回総会発表論文集 p.702~703 1984
5. 続 有恒：教育評価 教育学叢書21 第1法規 p.43 1969
6. 片山英雄：学生に学ぶ 川崎学園だより no129 p.15 1990